

# 九州大学インフラ長寿命化計画(個別施設計画)

Digest 版

キャンパス計画及び施設管理委員会

2026年3月 改定

## インフラ長寿命化計画とは

大学全体の共有財産である既存施設の整備・維持管理に要するコスト削減を図りつつ、安全で快適な教育・研究・診療環境の維持・向上に資する中長期の施設整備計画とその必要額をとりまとめたもの。

## 第1章 前回計画(2020~2025年度)の振り返り

### 前回計画の検証

- 施設整備費補助金による全面改修・ライフライン再生等は計画どおりに進捗した。
- 学内経費による中規模改修の進捗率は59% (実施193件/計画326件) にとどまり遅れが生じた。

### 計画の進捗が遅れた要因とその対策

(要因)

施設整備に係る学内予算の不足と工事価格の上昇  
想定外の支出への対応 (地中埋設物の撤去等)  
新たに必要となった建物やスペースへの対応

(対策)

適切な予算措置と施設整備のコスト削減の更なる強化  
報告と支援依頼 (事業毎にコスト負担の分担)  
既存施設の有効活用の検討

### コスト削減や財源確保の成果

#### 事例① 既存施設の有効活用



資料・新築費・維持管理費  
大幅なコスト削減

(伊都) イースト1・2号館

法科大学院学内既存施設への移転

#### 事例② CN先導モデル法人への採択



これまでより  
省エネ性能の高い補助金  
の要求が可能となった

カーボンニュートラルキャンパス  
施設整備計画の策定と実施

#### 事例③ 多様な財源による改修



文部科学省以外  
の補助金による改修

### 計画改定の理由

- 施設のトラブルによる教育・研究活動への支障や人身事故のリスクを最小限に抑えるため。
- コスト削減対策を講じたうえで、現状に適した施設の整備・維持管理に係る年間必要額を把握するため。

## 第2章 九州大学における施設の現状と課題

### 大学の規模

- 全国87団地に延床面積約106万㎡ 558棟の施設を保有。
- 伊都キャンパスの施設が延床面積の半数を占める。
- 国立大学法人の中で最大規模の敷地面積(約7,563万㎡)を保有。

### 施設の老朽化状況

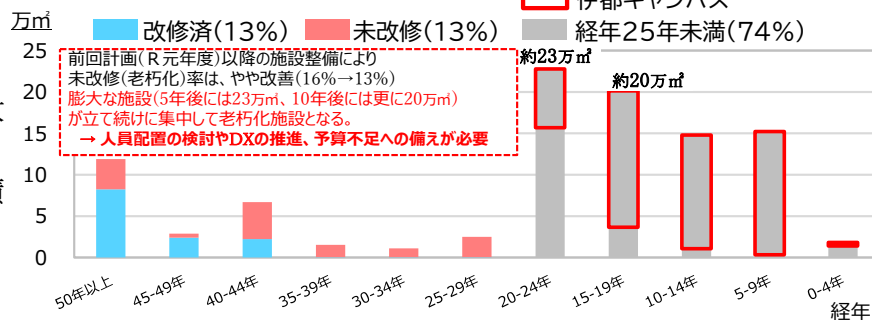


図1. 経年別保有建物面積(令和7年5月1日)現在 ※職員宿舎を除く

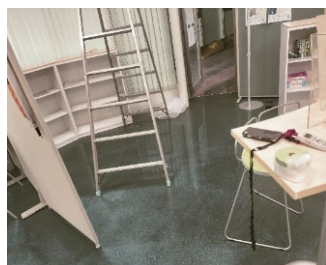
### 施設整備の課題

- 施設整備の学内予算は減少傾向。
- 当初計画の遅れにより、教育・研究活動への支障や人身事故のリスクが上昇。

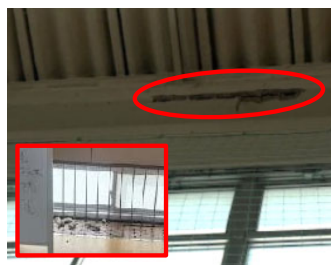
### 教育・研究活動への支障の例



空調の停止  
(ウエスト2号館)



雨漏り  
(センター2号館)



コンクリート片の剥落  
(病院地区 体育館)



庇の落下  
(ウエスト4号館)

# 第3章 キャンパス整備の方向性

## 国立大学法人等施設の目指すべき方向性

○第6次国立大学法人等施設整備5か年計画の策定（2026～2030年度）【文部科学省】

## 本学の方針とキャンパス整備の方向性

【九州大学における施設等の有効活用に関する指針（2001年 将来計画委員会決定）より】

校地及び校舎等施設が大学全体の共有財産であるという認識の下に、点検・評価を行い、総合的・長期的視点に基づいた総長のトップマネジメントによる施設等の有効活用及び安定的な施設の維持管理を図る。

○Kyushu University VISION 2030、九州大学キャンパス整備計画大綱（今後、策定予定）  
各地区マスタープラン、九州大学カーボンニュートラルキャンパス施設整備計画 等

# 第4章 コストシミュレーションと推進方策

## 条件1：施設の長寿命化

○前回計画では建物を80年間活用する方針としていたが、**更に長寿命化し100年間活用する方針に改めることにより、年間あたりのコスト縮減**を図る。

### 【例外となる建物の条件】

- ・旧耐震基準（昭和56年以前に完成）の建物
- ・コンクリート設計強度が24N/mm<sup>2</sup>未満の建物
- ・鉄骨造（S造）や木造（W造）等の建物

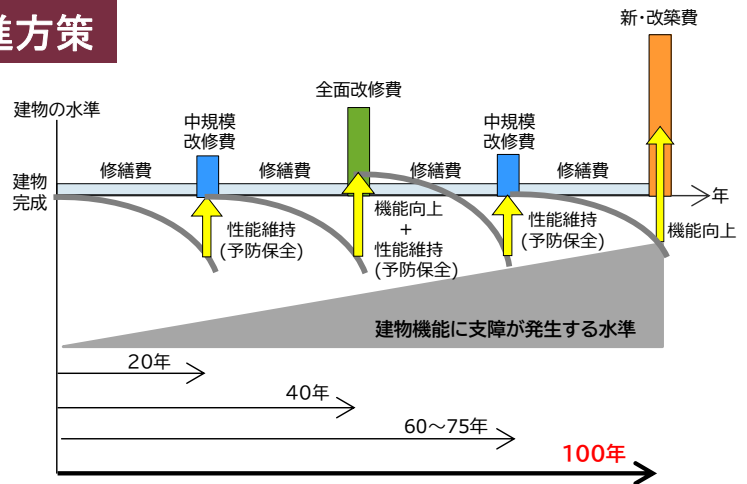


図2.100年活用する建物のサイクル

## 条件2：施設のトリアージ

○老朽化した膨大な施設を限られた予算で効果的・効率的に整備するため**施設の優先度をAからDに分類**。

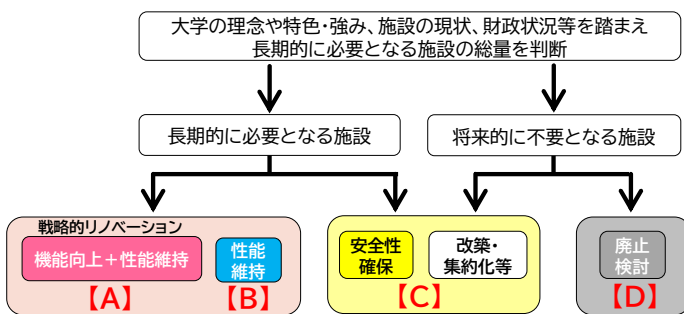


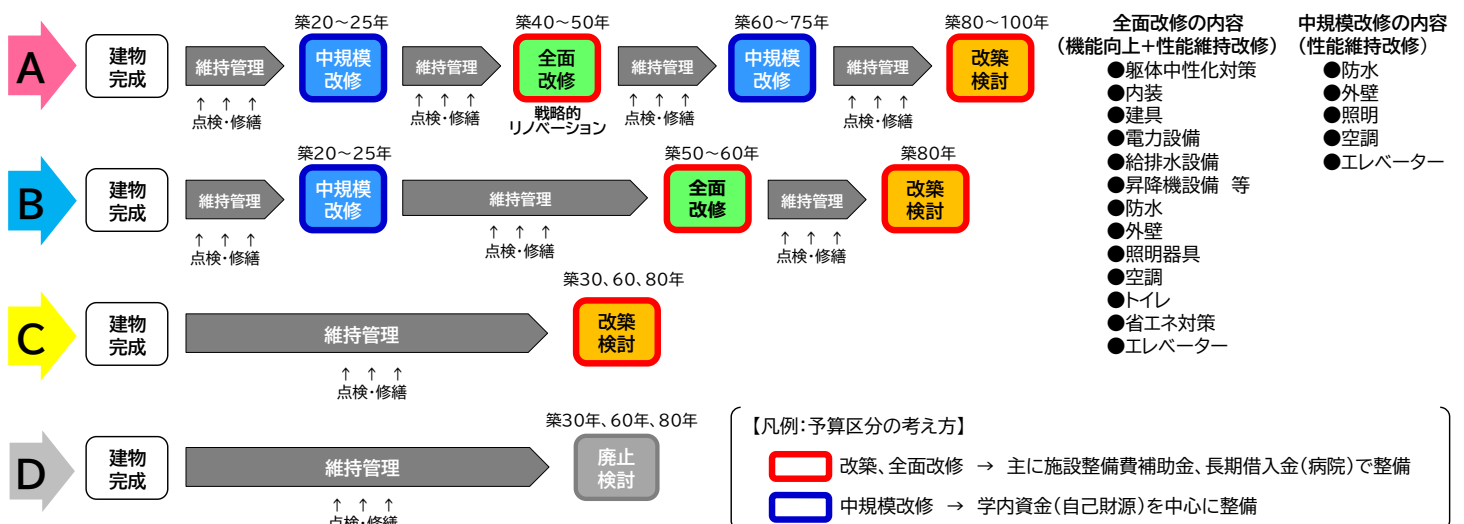
図3.施設のトリアージ

### 【凡例】

- A：重点的な投資を行い、機能向上及び性能維持を確保する施設**  
教育研究施設の主要棟、病院、図書館、情報基盤センター、大学本部施設等
- B：主に施設の物理的な性能維持を確保する施設**  
教育研究施設の附属棟（附属実験棟等）、体育館、寄宿舎・宿泊施設、福利厚生施設（食堂、学生会館、保育所）、エネルギーセンター 等
- C：最小限の安全性を確保する施設**  
小規模な教育研究施設、福利厚生施設（サークル棟） 等
- D：安全性の確保及び廃止を検討する施設**  
A、B、C以外の施設（倉庫・職員宿舎等）

高  
重点整備  
低

○トリアージ分類毎にライフサイクルを設定

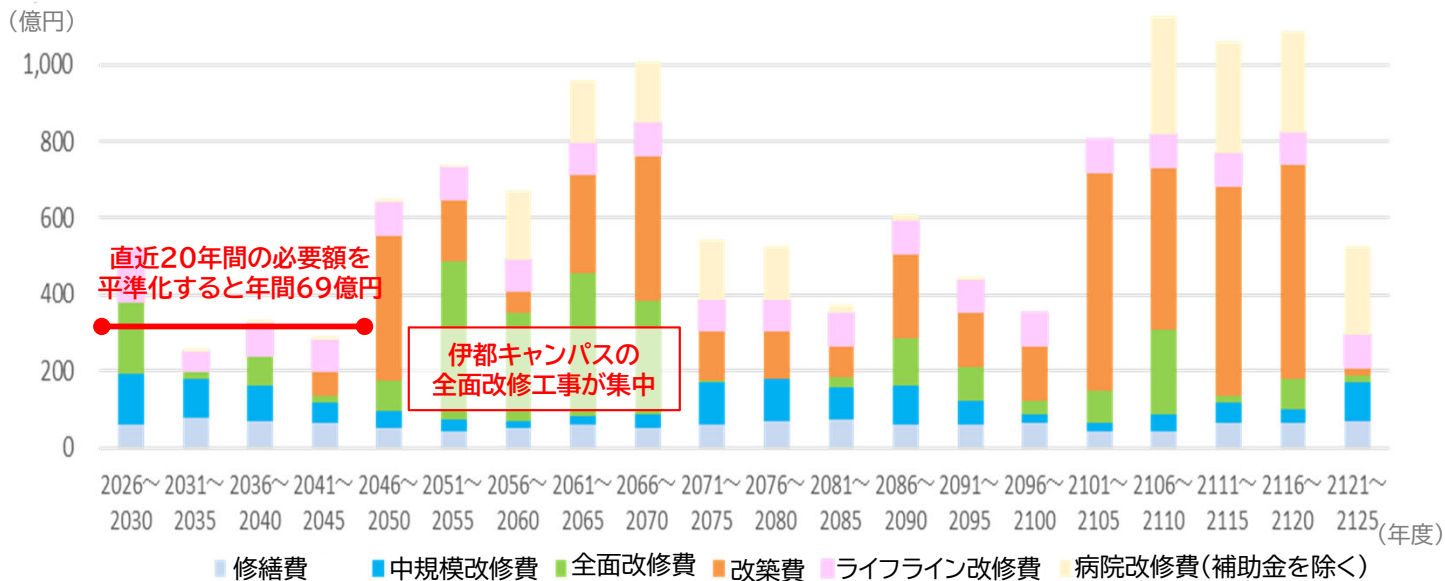


【凡例：予算区分の考え方】  
改築、全面改修 → 主に施設整備費補助金、長期借入金(病院)で整備  
中規模改修 → 学内資金(自己財源)を中心に整備

図4.トリアージ分類毎のライフサイクル

# コストシミュレーション

○今後100年間にわたる施設の整備・維持管理に必要な金額は図5のとおり、時期により大きく変動。  
 ○約20年後以降に、馬出キャンパスの建物改築や伊都キャンパスの全面改修の時期が重なるため、集中して予算が必要。



○年間に必要な施設整備費について、行動計画策定時（2022年度）から物価高騰やコスト削減等を踏まえて整理したグラフを図6に示す。

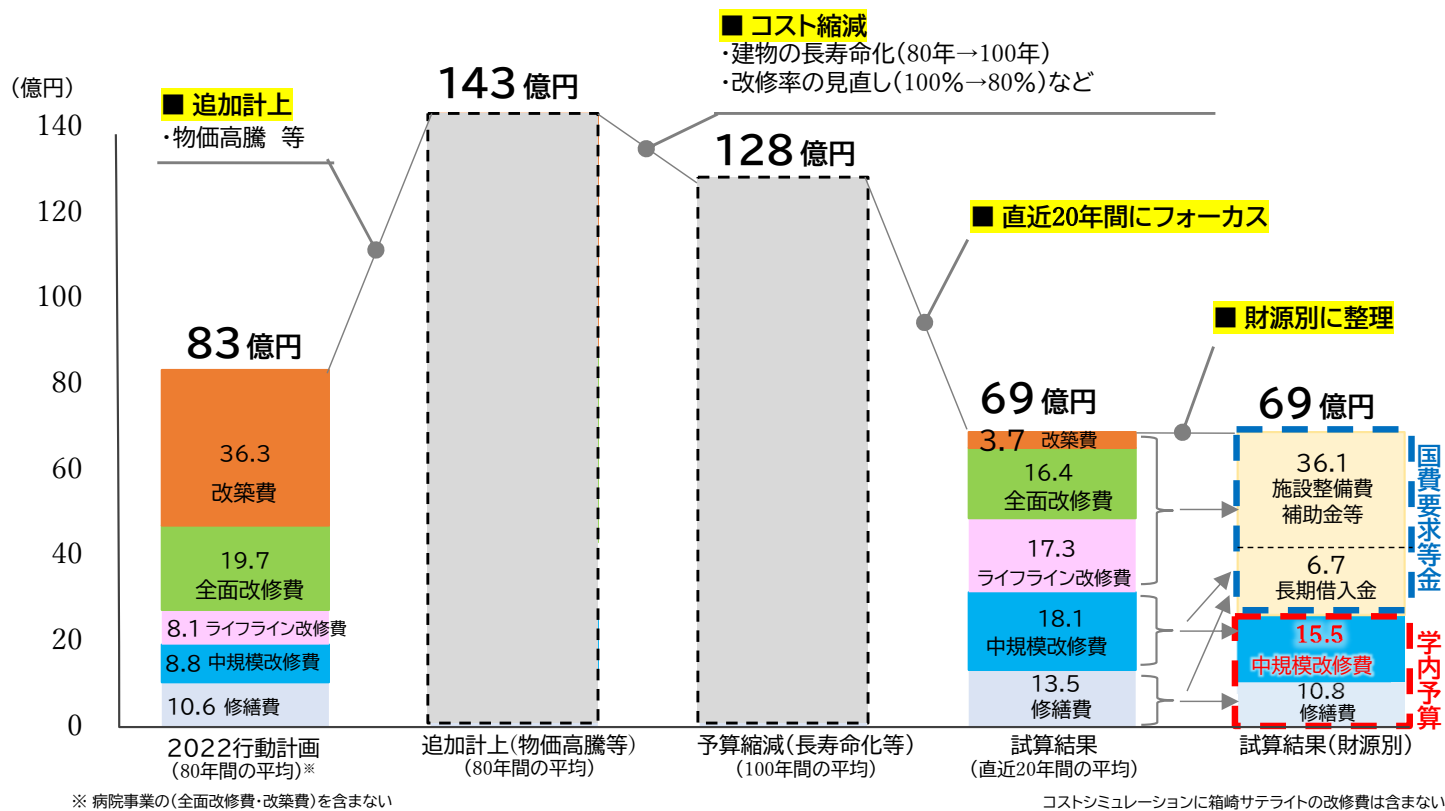


図6.施設整備にかかる年間必要額

## 試算結果（直近20年間の平均）

- 施設整備費に必要な金額は全体で年間69億円。
- そのうち学内予算は年間26億円必要。（中規模改修費15.5億円+修繕費10.8億円）

## 今後の推進方策

### ○保有面積の総量最適化による維持管理費の縮減

- ・新たな教育・研究スペースを確保する際に新增築で対応する場合は、建設費だけでなく、将来の維持管理や取壊しにかかる費用も念頭に置きつつ慎重に検討。
- ・まずは活動内容に応じて適宜改修するなど既存施設を有効に活用する方向で検討。

### ○DXの推進

- ・施設の整備・維持管理に関する業務の変化や人手不足に対応するため、DXを推進し、業務の一層の効率化と品質の向上を図る。

### ○学内予算（自己財源）の確保

- ・学内で施設の課題を共有し、安定的・継続的な施設整備の予算を確保。

### ○新たな財源の確保

- ・ネーミングライツの促進、民間資金の活用、基金の活用、省エネ改修による財源確保、土地の有効活用など。



ネーミングライツ  
(伊都中央図書館)



民間資金の活用  
(筑紫地区国際交流会館)



基金の活用  
(九州大学基金HP)

## 第5章 各建物とライフライン整備の年次計画

### 年次計画の考え方

- トリアージ分類毎のライフサイクル(図4)に基づき、各建物の改修時期を計画。
- 屋上に空調室外機が設置されている建物については空調と防水工事を同時期に行う等、**施工の効率化**による**コスト縮減**を図り、措置された**予算を最大限に有効活用**。

### 計画策定後のフォローアップ

- 5年毎を目安に建物劣化診断を実施し建物の状態を確認。
- 劣化診断の結果や施設整備の実績を建物カルテに記録し、継続的に年次計画を見直す。
- 建設資材や労務費の上昇などインフレにより工事費用が増加した場合には、本計画で試算した必要額を適時見直すとともに、必要な予算の早期確保や保有面積の総量最適化を進める。
- 本計画に基づく取組について、毎年度、キャンパス計画及び施設管理委員会に報告。



図7.施設の維持管理・更新を効率化するPDCAサイクル

～安全・安心で魅力的なキャンパスを整備～